三輪初子句集『檸檬のかたち』
朔出版

かたちは語る

山田真砂年

本句集は『火を愛し水を愛して』に続く第四句集である。前句集名からも分かるように、飲食店を営んでいた作者は、本句集『檸檬のかたち』のあとがきに、「生業の居酒屋レストランが、地主の所見から立ち退きを要求され、閉店を余儀なくされた。四十三年間点し続けてきた灯が消える…。自己の存在する「かたち」の倒壊に譬えようのない喪失感を味わい、その儚さが（中略）切り裂かれる前の清しく美しい果実、レモンの「かたち」である」と書いている。

自己存在の証であった店を閉じる喪失感を、レモンの鮮やかな色彩でも刺激的な酸味でもなく、その「かたち」であることに作者の詩質が見えてくる。「かたち」というキーワードで本句集を眺めると、まず、句集名となった句。

切る前の檸檬のかたち愛しめり

檸檬の少々ずんぐりした紡錘形という「かたち」を、掌が記憶しているのだろう。多くの檸檬を切ってきた手応えと営んでいた飲食店の歴史も蘇る。

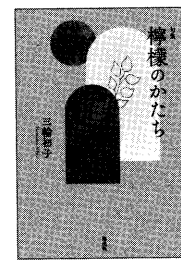
さらに、

バンザイのあとの双手や昭和の日

バンザイは、喜びの形・表現であるが、作者はバンザイをした後に喜びと正反対にある悲しみを幻想した。「天皇バンザイ」と叫んで死んでいった多くの人々の声が聞こえるのだろう。「昭和の日」がそんな解釈をさせる。

カタカナのやうなおじぎの入学児

幼さの残る児童がお辞儀をしている。ぎこちなく身体を折る様子をカタカナの様だと文字の形で表現している。



令和4・7・15
定価：2750円〈10％税込〉

霜の夜やペキパキペットボトル踏む

踏まれて形を変えてゆくときのペキパキという音は、役目を終えて不用となった物の悲鳴とも思える。

作者の詠む「かたち」は三次元を超えて時間をも含む多次元空間を創る。心に生じた情というモヤモヤしたものも、確かな手応えのある形として表現する。即物的な形だけでなく、スピリチュアルな形も表現する作者である。

老ゆること初体験よ春の服

老いとは現在の先にあるもの、形になっていないもの。徐々に現実となり、形をなしてゆく老いを実感しながら前向きに生きていく作者の心意気は見事と言える。

本句集には、他にもバラエティーに富んだ幅広い作風の作品がある。

狐鳴く夜は風呂の湯熱くせよ
陵や空より青き蛍草
手のひらの闇をひらきし涼新た

〈狐鳴く夜〉〈蛍草〉〈手のひらの闇〉など象徴的な詩情溢れる句も楽しませてくれる。